[蘭越町総務課職員]

もしもし、はいお待ちください。

[渡辺]

渡辺です。

[野村]

すみません。私、蘭越町の富岡の野村と申します。渡辺課長ですよね？総務課の。ちょっとですね、前の小林さんからの引き継ぎの件で、確認したいことがあるんですけど。チセハウスの跡地。小林さんが内々で進めようとしてたのが、おととしだったかな、内々で所有者と話しをしてることを、僕も隠してたことがあったんで、すごく僕は、不信感を持ってるんですけど。

[渡辺]

はい。

[野村]

あの話をしてるにも関わらず、その売買の、建物の賃借権の話ですよ。その賃借権の話で、その件を僕が聞いて、「何か話があるんですか？」と、聞いたら、「ない」と言いながら、後から資料請求すると、僕が聞いた１週間程度前に、当事者と打ち合わせをして、「建物を建てるから協力して欲しい」みたいな話が、記録が出てきたわけですよ。そういう話をしていながら、嘘をつかれたんで、すごく僕は不信感を持ってるんです。

[渡辺]

はい。

[野村]

小林さんに限らず、いろんなところで、結局、内々で何かを決めてしまって、表向きにはしないで、形だけ、民主的に決まったプロセスを整えるということを、もう長年なんか（不明）みたいにやってるんじゃなかろうかという気がしてね。あれこれ、いろいろ、聞いてるんですね。ちょっとこのお電話で確認したいのは、チセハ

ウスの跡地は、どうなってます？

[渡辺]

跡地はですね、何もその後にですね、特に利用するとかっていうお話は、今のところ予定はないです。

[野村]

けど、いやあのね、だからそれをね、普通であればね僕もちょっと星野リゾートのところまで遡って、確認してると、どうもやっぱり、町長・副町長で、決めてしまって、後からコソコソと、何か体裁を取り繕っているようにしか見えないんです。あの土地であっても、当然、今の町にとっては、もう帰ることのない財産なんで、あれをどうするかというのが、町民に対して、まず、「これがあるんだけど、どうしたらいいだろう？」とアイディアを求めるぐらいの、ことをするのが、民主的な自治であって、地方自治であってね。それを、自分たちで何かアイディアがないからそのままね隠しておくというのがね、すごくよくないわけですよ。すごくよくない。涼むを通してそういうことばっかりやってるあなた方ね、多分なんか前の町長もね、このねやり方がそれが当たり前だと思い込んでるような気がしてしょうがないんですけどね。

[野村]

それをね、その知性ハウスについてお尋ねしますけどね。あのねどうするかをあなた方が決めてしまう前にねね、町民に対して、「こういうこういう状況になってます」と、「どうしましょうか？」ぐらい打診ってしないんですか？

[渡辺]

これからチセハウスの跡地をどうこうするっていうのはですね、今の時点では、予定的には、こういう予定だっていうことでは、何もプロセス持ってないもんですから、

[野村]

いやそれは、小林さんは、内々で、何か進めようとしてたんですよ。記録を見る限

りはね。

[渡辺]

お話がちょっとあったと思うんですよね、そんときにね。その後にどういうふうに使いたいというようなお話が、きっと先方からちょっとあった中で、そういうお話になったかと思うんですけども、それでそれを前に進めよう、とかっていう意図ではなかったとは、認識してるんですけども。

[野村]

そこは、結局、証拠がないことは何とも言えないんで、僕も「そうですか」としか言えないですよ。隠されたからね、隠されたからね、公然と「そういう話ありましたよ」と言えばいいのね。隠すからね、怪しまれるわけですよ。ほんの１週間前に、そういう打ち合わせをしていながらね、「何もそういうあの話はない」みたいなことを、隠すから。僕も、疑心暗鬼になるんですよ。今ここで聞きたいのは、あの決まってないんであれば、もう１年も、２年近くたつ話なんでね。当然、「あれをどうしましょうか？」という。「どうしましょうか？」と、みんなで考えるのが、妥当じゃないですか？それ、誰が考えても、こういう形で使うのが有効で、それを、例えばですよ。いや、例えばは、止めましょう。なんか、誰が、100 人中 100 人が、使うのが当たり前だというものが、決まってくるんであれば、それはもう内々である程度進めて、その上で、決めても構わないと思いますよ。ただ、いろいろ、きな臭いことがいっぱいある、あの辺りは。いっぱいあるスキー場も。それから、温泉施設もね。それからチセハウスの跡地もね、全てね、なんか公正明大じゃない。あなた方がやってることが。とても不信感を持ってる、でね、そこは、どう使うかというのが、10 人中 10 人が同じ答えを出すものでもなくて、「さてどうしようか」というレベルの話しなはずなんですね。

[野村]

町にとったって、何も明確なものがなしで、町長が密室で決めてるようなところが見受けられる。見受けられる。少なくても、星野リゾートに関しては、密室でね、

コソコソと決めてしまって、排除したようなところが見受けられる。お尋ねしたいのは、決まってないんであれば、それ、公にすべきじゃないんですかね？どうしましょうかと。

[野村]

ここの場所をですね、今のままで、もうその第３種特定地域の国定公園なもんですからね。綺麗にして整地していただいて、あそこに何かをやるっていう限定されるものではないと思うんです。（不明）の中でそのまま行っても構わないですし、そういういろんな考えもあると思うんです。

[野村]

そうやって、あなた方はね。でも、聞いてますよ。あのブラックダイヤモンドからね。「売ってくれないか？」って話しがあったとか。そういう人が「建てたい」って話が出たり、いろいろ話が出てますよ。黙ってたらいっぱいね、いろんなところからね、声がかかってね、あなた方が内々外で話しをしたら、内々で話をしたら、それは、あなた方だって、なんだ、うちにやってくれたら「ああだこうだ」という、話しだって出ますよ。それを僕はものすごく恐れてるんです。

[渡辺]

うん。少なくてもですね、いま私は、そういうあそこの跡地についてのお話は、まだ全く伺ってませんので、どういう展開になるかわかりませんけども、そういうお話があればですね。そういう形でですね、提案なりしていくことも考えなきゃなんないなとは

[野村]

それはね、それをしてしまったら、結局、あなた方が、緑地として保全するってこと、決定されたんであれば、それ・・・

[渡辺]

決定はしてないですよ。

[野村]

宙ぶらりんな状態で。何か、建物が建つのか、売るのか、「何かあるのかな？」という状態で、放っとけば、いっぱい声がかかってきますよ。あなた方のキーとなる人に。それは、小林さんなのか、渡辺さんなのか、分かりませんけど、「売ってくれ」と「貸してくれ」とかね、そういう話しが来ますよ。目立つ場所だから。それを来た後で、あなた方が密室で決めてしまって、便宜を図って、後から取り繕って、民主的に決まったかのようなやり方をされるのを、すごく僕は、懸念してるんです。いっぱいあるから、そういうのが、いっぱいある。調べると、ことごとくそうなってるよ。だから、ここで確認したいのは、今ないのはわかりましたよ。小林さんが、小林さんが前のオーナーとね賃借権の、話を、建て替え後の賃借権の話を、打ち合わせしてた話が記録に残ってて、それ以外は、ないんですね？渡辺さんに対して直接聞いてないんですね。

[渡辺]

ないですね。

[野村]

ないんですね。でもね、僕、言ってる通り、今ちょっとコロナで少し停滞してるけど、みんな安く、いい場所を買おうとしてるわけですから、いっぱい声かかってきますよ。

[野村]

この前、この前の、その少し前のね、もらった温泉公園の隣だって、黙ってたって、向こうから「安くしてくれ」「安くしてくれ」と言われて。でね、あなた方、結局安くしちゃってるわけですよ。民主的なプロセスを経ずに。

内々で。ああいうことを、びっくりするような安値ですよ。「5000 万だったら、ちょっと高いな」と言ってるところに、700 万以下に抑えたんですから、議会の承認のいらない。相手が数千万円を覚悟してね、交渉してるのに。議会の承認のいらない 700 万以下に、あなた方は抑えたんですよ。何の根拠もなく。副町長はね。固定資産の評価に（不明）ってるみたいに言ってるけどね。高値で買いたい人がいるのに、

そういう内々でやられちゃうと、なんかね、やっぱフェアじゃないんです。ないんですよ。ごめんなさいね。ちょっと長話ししますけど、あなたがおっしゃる通り、今の時点でないのは、分かりました。ただ、僕、言ってる通り、懸念してるのは、あなた方は、使途を明確にする、もしくは、今この状態にあって、何か使うんであれば、普通に考えれば、スキー場の延長ですよ。どう考えても。スキー場の延長として、あそこに建物を建てられて、スキー場と一体として、やるために有効な場所ですよ。でも、あそこは、あなた方が変なことしちゃったから。僕が考えたら、どう考えても、あそこ、スキー場から声かかって、何となく、今のスキー場とリンクするような形で、あなた方、やりますよ。内々で。そうじゃなくてね、今こういう状態になってると、僕が指摘してる通りに、スキー場にしたって、結局、提案と違うことをやってるわけですよ。誰が見てもおかしい。星野にしたって、その前の人材派遣の会社にしたって、散々、途中で中止する可能性を露骨に言って、排除していながら、今のスキー場に関しては、わざわざ、買戻しの特約を排除してる。

[渡辺]

うん。

[野村]

わざわざ、後から何も言えないやり方にして、こんなことやられたら、「またやるだろうな」と、僕が思うのは、僕以外にも、思う人いるよ。だからね。いや、あなた１人で決めることじゃないけど、僕が明確にしたいのがね、明確にしたいのはね、今はまだ決まってないんであれば、どうすべきかを、町民から意見を求めるべきじゃないんですかねっていう疑問なんですけど。それに対してね、渡辺課長が、回答、もう１回聞かせ願えます？

[渡辺]

うん。それはちょっと野村さんの意見として、私の方でも受け止めておきますけども。あそこの場所だけでなくてですね、全てにおいて、そういうところ、可能性のあるところってあると思うんですけども。方針として、今どうするっていうことは、

この場でまだ決めれないことですから。その辺も含めて、一つのご意見としていただきたいと思いますけども、

[渡辺]

副町長と全く、同じ言い回し。全てを、十把一絡げにして、本当にあったってどうにもない土地と、もう唯一無二の町内一等地、一絡げにして、あなた言ってるよ。僕言ってるのは、あそこに代わるものないわけですよ。目名の駅前の、誰も手をつけないような、空き地と違うんですよ。

[渡辺]

うん、それはもうご意見いただいておきます。

[野村]

僕は、ご意見なんかしてないんです。僕は聞いてるんです。そういう特別な場所で、しかも、周りの、開発においては、ちょっとどうも、僕は状況証拠は十分添えているつもりだけど、直接証拠はないから。でも、なんか、どうもフェアではない処理をされてるように見える。あそこは蘭越町の一等地、ものすごくキーとなる場所、代えられない場所。それが空いてる状態、いま決まらない状態であれば、それを、どうするかを、広く町民に意見を求めるというのは、僕は当たり前のような気がするんですけど。ここまでは、僕の意見。で、それに対して、あなたは、今のまま宙ぶらりんのままで、何もしない、何も決めない、町民に対して意見を求めない、その状態で、その状態が、適切なんでしょうか？

[渡辺]

いや、決めないとか、そうじゃなくて、検討していかなければなりません。

[野村]

検討していくのは誰なんですか？

[渡辺]

組織として、それは検討していきます。

[野村]

それは町民の検討すべきじゃないんですか？町民に公表して。内々で、密室で、あなた方が有力者だけが、地権者と、カネ持ってる人と密室で、話をして決めるんじゃなくて、町民に広く公開して、意見を求めるのが、妥当な民主主義じゃないんですか？

[渡辺]

密室とか、そういう話じゃなくてですね。まず、あそこの場所をどうしていくかっていうことは、やっぱり、もちろん町民の皆さんにも周知していかなきゃならないな、というふうに思ってますよ。

[野村]

やったらどうですか？「今こういう場所があるんです」って、「重要な場所です」と、「何かいいアイディアだったらね、出してください」ぐらいで、あなた方が決められない、いつかやらなきゃいけないって言うんであれば、広く出せば、そりゃ良い意見だって出てきますよ。

[渡辺]

それはちょっとご意見としていただいときます。

[野村]

いや、聞いてるのは、僕は、質問してるんですよ。あなたは、どうするつもりなんですか？僕は、それが、そうすべきだと思うし、あなた方も、これからね、うん。これからねそうしなければならないと言ってるんであればね、これからしなければならないね今日あなた方はねね担当者でやろうとしてるよ、担当者で、担当者でもさっきも言ってる通りねねちょっと遡ればねね小林さんがねナイナイでコソコソとね、やったことを隠そうとしてるから僕は言ってるんですねスキー場にする温泉施設にしろね密室でね、町長副町長がコソコソやって、コソコソやって、後で自主証拠見ると、「ちょっとどう考えても、これ、おかしいんじゃないの？」っていうことが、記録されてる。それを僕は密室と言ってるんですよ。

[渡辺]

うん、そうですね。そうですねちょっとその辺はね、何と三つっていうのが適切かどうかわかりませんけどね。町の担当者とねとね、例えば、何か営業してきた人が、個室で話したら、それ密室ですよ。響きは、よくないけど。

[野村]

密室だから記録を残すんですよ。どういう話しをしたのかってことを残すわけでしょ？いわゆる悪い意味での密室化防ぐために、記録を残すわけですよ。でもその記録だって、どこまで正しくとるかどうかは、あなた方のさじ加減一つだから。ちゃんと録るのか。見せたくないところを隠すのか、あなた方のさじ加減で、どうにでもなるとこなんですよ。だから、何度も言ってる通り、まず公然と、今やろうとしてることを、公にして、広く意見を求めることを、なんで、あなた方がやろうとしないのか。僕は不思議でしょうがないよ。全てにおいて。

[渡辺]

それはね、うん。今後検討していかなければ・・・

[野村]

そんな抽象的なことしか（不明）。でも結構です。多分あなたもあんまりこういう追及されるような口ぶりで、答えることも、僕みないな人も珍しいでしょうから。

[野村]

ごめんなさいね。ちょっと今日お電話したのは、WEB サイトのリニューアルの件ですけど。あのとき、渡辺さん、いらっしゃいましたよね？

[野村]

（不明）。います、います。

[野村]

前回４人ぐらいで、私に

[渡辺]

そのときには、いませんでしたね。

[野村]

今ね、WEB サイトのリニューアルの情報開示の請求を、工藤さんが窓口で、行ってるんですね。「開示ができるようになりました」ということで、連絡を受けて、今これから工藤さんと話をしないといけないんですけど、これにちょっと小林さんが絡んでるんで、小林さんと渡辺さんにも入って欲しい。あなた方が、一応委員会の頭でいた話なんで、それを僕、資料を見ながら、確認したいことがある。

[渡辺]

今日ですか？

[野村]

いや今日じゃなくて構いません。小林さん渡辺さんのね、都合のいいときで構いません。小林さん渡辺さん、とにかく小林さんと松山さんが、いる場所じゃないと。質問しても、工藤さん、何もわかってないんで。

[渡辺]

うん。

[野村]

小林さんと、松山さんが必ず、同席する場所。小林さんは決定権を持ってるし、松山さんは、ある程度技術的なこともわかってるから、

[野村]

うん。それ話しを伺いたいということなんですね？そんな・・・

[渡辺]

いただく資料の中で、情報開示をしてもらう資料の中で、工藤さんでは答えられないことがいっぱいある。あまりにも多い。うん、ちょっとね、それもあれですね、確認してですね、同席時間とかもありますので、

[野村]

そうですね。時間は、全くこちらの希望なんで合わせますんで。ただね、僕、情報開示、いっぱい、いろんなとこでやってきてますけど、一応、頼めば、それを所管する担当の人が来ますからね。何も分かんない人が、来るんじゃなくて。それに対

して質問が出た場合、ちゃんと答えられる人が必ず来る。どこであっても。国であっても、都道府県であっても、必ず来るよ。それをちゃんと、保証してほしいから、あらかじめ誰と誰にということを、お願いしてるんです。僕は。

[渡辺]

ちょっと折り返し電話して、確認して電話します。

[野村]

すみませんが、これ工藤さんに、同じことを伝えなくて大丈夫ですか？

[渡辺]

あの工藤に伝えておきますので。

[野村]

すみませんがお願いいたします。よろしくどうぞ。